

楽 器 あ そ び

村 井 ト ミ

なること。

○自分の扱う楽器に責任をもって、皆で協力するということ。

○リズムに合せて、次第に正しく打てるようになること。

右の五つの事が言えると思うが、大切なことは、一般に合奏という形になるとむづかしい教材を与えて、技術的な練習にとかく骨を折りがちだということではないだろうか。特に何かの集会で合奏をするとなると、最初から受持の楽器をきめて懸命に練習し、当日その子どもが休んだりすると困ってしまったというようでは何の為の指導であろうかと考えざるを得ない。

こちらの目標をもっと低いところに置いて練習に汗をかかないでも、子どもたちが喜んで遊び、美しい音で、正確に打つということに注意をほらいたい。

又、みんなで心一つにして合奏すれば自分たちでも思いがけず美しい合奏ができてうれしいことを知らせたいと思ふ。

又最後にあげたように、正しく打つということは、簡単な曲を、ゆっくりでいいから、できるだけ正しく打たせたいということであ

る。

二、どんな種類の楽器をあたえたらよいか。

数多くの楽器をとり入れているところもあると思うが、ハンドカスター、タンバリン、トライアングル、鈴、大だいこ、程度が最も適当ではないだろうか。拍子木などは入れてもよいが、小だいこ、シンバルとなると相当高度になる。これも年令的に与え方があると思うが、私の経験からは次のような順序がよいのではないかと思う。

三歳児 二期頃よりハンドカスターをあたえる。

四歳児 一学期からカンパリンを入れていく、三学期頃より鈴を入れる(四歳で入園する場合は三歳に準ずる)

五歳児 一学期からトライアングル、二期頃から大だいこ、三学期には伴奏としての子どものピアノなど入れてもよいと思う。

三、各楽器の割合(編成)はどの位がよいか。
ハンドカスターいくつにタンバリンいくつというはっきりした規定はないが、要するに合奏が美しくなるように決めればよい。狭い室、広い室などと室の広さにも関係するだ

六月の実地指導研究会で、子どもと楽器あそびをして遊んだので、それにも関聯して、幼児にはどの程度の楽器あそびをさせたらよいであろうかということをもとめてみよう。

楽器あそびといっても、ここでは簡易楽器のあそびである。

一、指導のねらいをどこにおくか

○楽器あそびをたのしむようになること。

○誰でもがどの楽器でも扱うことができること。

○美しい音、美しい合奏に関心を持つように

ろうし、楽器の編成によっても音が美しくも、きたなくもなると思う。

子どもたちに楽器を与えて打たせてみるとよくわかるのであるが、タンバリン、トライアングルなどは数が多いところさくなるし、鈴などは相当多くても美しい。大だいこなら一つでよいであろうし、ハンドカスターも数が多い方がはつきりしてよさそうである。

理想的ではないかもしれないが、私の組での編成の一例をあげておくことにする。

大だいこ

一 タンバリン

三 トライアングル

三十五人 鈴(沢山翁のついでいるもの)六人

二〇〜二二

四、編曲

製作や動きのリズム同様に、楽器あそびも声を大にして、易しく、易しくと言いたいところである。曲は短い、リズムのはっきりした、感のよいものを選び、リズム型をなるべく簡単にして、子どもたちにすぐ理解のできるように編曲するべきだと思ふ。年少組は勿論、年長組でも一、二期の頃は先生が編曲する。年長の三期頃は、先生が原案をも

っていて、或程度は子どもたちに考えさせてみたい。(楽器を与えて) この頃には相当耳もでき、美しさの比較も感じられるようになるので、無理のない程度にしむけていくことも必要と思ふ。

五、実際にどのような指導をしたらよいか。

○まず導入できるような環境をつくっておくことであらう。

保育室はいくつかのハンドカスターを日頃から用意しておき、自由あそびの中で使わせるとよい。年長なら幼稚園ごっこなどして自由に遊んでいる中でうまく取り入れられる場合もよくある。年少ならただ鳴らして喜んでいるだけでよい。又何かの機会での他の組や先生たちの合奏をみるのも環境の一つと思ふ。

○曲は最初は子どもたちの耳なれた知っている曲を使う方がよいと思ふが、年長の場合には新曲で反応してみることも折々必要だと思ふ。

次の年令によって特に強調したい面をあげてみよう。

三歳児

○子どもたちを集めて、さあこれからはじめ

ましようというように楽器を与えるのでなく、子どもたちの遊びの中に楽器を入れていきたい。遊びをよく観察していて、適当な時に楽器を取入れるとか、先生の方で遊びを意図してその中にハンドカスターを使うとか、例えば、汽車が急行になったらハンドカスターを打ってあげるとか、ピアノに合せて歩いていてハンドカスターが鳴ったらいそいで椅子に腰をかけるなど、考えればいろいろあると思ふが、いかに面白く生活の中に流すかが、特に年少組の時の大切な導き方ではないだろうか。

最初は勿論正しくは打てないが、だんだんに正しく打つようにしむけ、これ以上の楽器をよくばららないでいいと思ふ。

四歳児

○四歳児でも新入園の場合は三歳と同様に這入っていききたい。

○三歳一年を過ぎた幼児だったら、そろそろタンバリンをあたえてみよう。

このように新しい楽器を与える時には一応打ち方や持ち方を説明して、あとは室に置いておき満足できるだけ使わせるとよい。この時にやかましいからおさえてしまふ

と、かえっていけない。

○一曲を細かく区ぎらずに、一曲全体をハンドカスターにしたり、或はタンバリンにしたりする。

○せいぜい二種（三学期には鈴を入れて三種）の楽器で、曲を二分、又は三分する程度の分奏、又は合奏にとどめたい。

○併せて将来美しい合奏ができるような基礎打ちを日頃からしつかりと身につけるようにしたい。

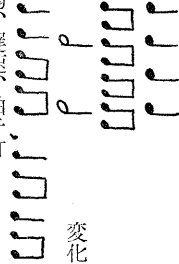
四分音符

八分音符

二分音符

けたもの

など 強弱、遅速、拍子打



これらのことは動きのリズムで、リズム感を得ずと同様に進めていくわけだから大した苦勞や無理がなくていくのだと思う。

○更に腰かけて打つだけでなく動きのリズムにハンドカスターをとり入れるとよい。歩いたり走ったりする時に使ったり、小鳥の曲で飛ばせて、小鳥と小鳥が話をする時だけハンドカスターを打つというように、動

作の一部分だけ使ったりしてあそぼせると一層興味を持つ。

五歳児

○四歳につづいて基礎打ちの応用範囲も広くなり（例



など）全音符（○）

簡単な休止符（○）

など）位はできる。又リズム打も相当しつかりとさせたい。

○五歳ではトライアングルも、大だいこも這入って、どうやら合奏らしい形態もできるようなになるので、ここで新曲から合奏までの指導を一通りあげてみよう。

新曲より合奏まで

まず新曲を何度もきかせたい。曲に合せて好きなように拍手したり、体のどこかを叩いたり、小さくハンドカスターを叩いたりしながら聞かせる。

×大体曲がわかったら、皆で一緒にしっかりと打つてみる。

×子どもたちが自由に打った中から、種類の違う打ち方をとりあげて皆で打ってみる。

×タンバリン、トライアングル、鈴、大だい

いこなども与えて、交代に打つてみる。

（曲全体を通して）

×全楽器で一緒に合せてみる。

×終始全楽器の合奏では美しくないので、交代に打つたり、楽器の組合せを考えたりしていろいろに打つてみる。

×どの楽器を組合せたのが好きだったか。

どれとどれの組合せが美しいかななどの話題を投げて、先生と子どもたちと相談しながら合奏をする。

×一番皆の美しいと思ったものを決めて、楽器を交代してあそぶ。

○二学期の末頃から子どもの指揮が這入って来よう。

○三学期頃になったら子どもの伴奏を取り入れてもよい。こんな時は先生も子どもの一員に加ってするのもいい雰囲気であろう。

○ハンドカスターを面白く動きにとり入れてあそぼせる。

例一親とりとひよこ

（二人組で親が呼ぶ時、ひよこが答える時などハンドカスターを使い、他は自由表現）
例二でんでん虫

（二人組で、一人の子どもがでんでん虫の

まわりをまわって話をする時だけハンドカスターを打つ。でんでん虫が角を出す所など自由表現。又、ハンドカスターの鳴き方にでんでん虫がついて歩くのも面白い)

以上、狭い経験の中から記してみたのだが結論としては、楽器の技術的な練習に苦しむのではなく、簡単に、美しく、いかに、たのしく子どもたちの合奏、子どもたちのあそびとしていくかということに重点をおくということを変更して強調したいと思う。

(お茶の水女子大学付属幼稚園)

競 争 あ そ び

村 田 修 子

幼児が競争あそびをする場面を考えると、そのもつ意義を十分に發揮して遊べる、つまり、自分の力を出しきって競争して遊ぶ、というのは大体が自由遊びの場面である。或る発案に何人かの子どもが賛成して出来上がったグループで競争するときは、それに参加するという人自体が、「しよう」という意欲のある人なので、そこにはもり上った気分が最も出される。そして子どもたちだけでも夢中になって長い時間つづけて行われる。

そこにちょっと先生でも入ろうものなら、よけいに競争心をわきたたせてくる。この場合は他の遊びをしていた人たちも大抵応援の方にまわり、一応それに参加したような形になる。けれどこうして自由遊びの中でしていると、競争あそびに参加する人、というのが大体きまってしまう。それは大体が男の中で活ばつな積極的な子である。

こういう人たちにて、段々とむずかしいきまりのものを指導していってもついてきてどんどんする。そして簡単ではあるが、一応の技術のようなもののみこんで、いやが上にも興味をもつようになってくる。たまに積極的な女の子さんが参加することもあるが、

割合に長つづきしない場合が多い。なんとかして参加させようと試みたが、たいていは全然といていくらい関心を示さない。

参加しない理由について考えてみると、競争する、という意識は三歳位のときからあるけれども、四・五歳になると、単なる競争というものに、ちがう要素が加わって、全体の中の自分の位置、という比較的な見方をするようになるためか、気の弱い子、自信のない子、逆に勝気な子、は参加しなくなってくる。

勿論、グループで競争する、ということも幼稚園の時期にみんなに理解させる、というのは無理な段階で、本当にその意味が分ってくるのは小学校の二、三年位なので、幼稚園では目標をそこまでもっていかなくてもよいと思う。ただこの時期は一人一人の子どもの環境によって個人差が大変にある状態である。けれど、そういうものの面白さを幾分でも味あわせたり、目ざめさせたりしたいと思う。幸い、先生が何かしていると幼児はついてくるものである。今までの経験から、たとえば、「活ばつに遊ばせるようにしよう」という意図をもって接すると、それを言葉でい